



ひさかき清水

ひさかき清水は宝徳元年(一四四九)一乗山妙本寺の開山以来、寺用として利用されてきました。しかし旧田家村が丘陵地帯より漸次北側平地に発展し、人家が造成されるに従って人口が増加すると、それまで一般住民用として使用されていた上隣の清水がその需要を賄いきれなくなり、清水の庄屋が寺に懇請し、近隣住民の飲用水として使用させてもらうようになったと伝えられています。以来その使用者達をもって清水組合を組織して清水を管理し、昭和三十年代に上水道が普及するまで利用されてきました。

寺用として利用されていた頃の清水は、今よりも小規模な湧水であつたと思われませんが、住民用として利用されるようになってからは、留水部分を拡張して周囲を石垣で囲み、雨水を防ぐために屋根を設置するなどの、様々な改良が施されてきました。



妙蓮寺裏手の丘陵地帯には、「ひさかき清水」の上手に一か所、下手にも「昭和清水」と呼ばれる清水が存在していました。「昭和清水」は新開地の住宅増加に伴い、昭和に入ってから掘られた新しい清水ですが、これらの清水は上水道の普及と共に利用がたれ、または枯渇してしまいました。

しかしこの「ひさかき清水」は現在も常に一定の清澄な水を湧き出して、真夏に日照りが続いても決して涸れることはなく、いつでも新鮮な水を汲み取ることができます。そのため近隣住民はもとより、遠方からの人々にも利用されています。

「ひさかき清水」という名前の由来は、この清水裏手の山に古来よりひさかきの老樹があり、枝を大きく張り出し、葉をたくさん繁らせて清水を覆っていたことから、誰からともなく「ひさかき清水」と呼ぶようになったそうです。しかし同樹は数十年前に枯死してしまい、現在は若木が植樹され、清水の周りに生い茂っています。

市民文芸

短歌

阿賀野川の岸岨岩を踏まへ立つ赤松千穂の容姿を見せて

三年して花咲き揃へるラベンダー心充すかしばらくの間
諸橋 真次(金沢町二)

俳句

酔ひぎめの欠伸欽込む夜長かな

秋耕の土に匂のなかりけり

生味の〇ー一五七が一人占め

電話口一番鶏も仲間入り

菅井政平(大安寺)
佐藤順蔵(新町三)
岡村健二(中新田)
齊藤大茂津(古津)

鉄道

資料館だより

(20)



96号煙室の修理

前照灯は、前方の照明と列車標識をかねているもので、探照燈形の箱内に特殊の形状をしたガラス製の反射鏡を設け、平行の光ができるだけ遠くまで照射できるように工夫してあります。

煙室戸は気密が大事で、気密に締付けないと戸の隙間から外気が進入して煙室内の部分真空を破壊し、そ

の結果石炭の燃焼不良をおこして蒸気の騰発を悪くします。これを防止するために石綿紐パッキンをまわりに使用して気密を保っています。当館にある煙室戸は九六形式のもので、主に米坂線を走っていました。

